

太宰治における「罪」の意識

寺尾誠真

太宰治の年譜をひもといてみると、自殺の試みの多いのに驚くばかりである。次に記してみると、

一九二九年（昭和四）二十歳 十二月、カルモチン自殺をはかる
一九三〇年（昭和五）二十一歳 銀座のバーの女給と心中をはかり、女給は死亡。

一九三五年（昭和一〇）二十五歳 三月、都新聞社の入社試験に失敗、鎌倉で縊死をはかる。

一九三七年（昭和十二）二十七歳 妻初代の過失を知り、谷川岳の山麓で心中自殺をはかったが、未遂におわる。

一九四八年（昭和二三）三十八歳 六月十三日、山崎富枝と玉川上水に入水。

と、四回の未遂事件を経て後十一年目に、いよいよ最後の自殺という事になる。まるで死ぬ為に生まれてきたような作家である。「生まれてすみません」（「二十世紀旗手」）と言い、「生きているのが罪の種」（「人間失格」）と言う。こゝに生の否定がみられる。

太宰が生を否定するのは、世の中に対する絶望のためというよりは、自己に対する絶望という感じが強い。自虐的、自己否定的な作品が主である。奥野健男は、「生への本能の欠如、つまりエラン・ヴィタールの不足」と評している。自殺は、自己或は世の中への絶望なしに行える筈がない。

太宰治は、自己の何に絶望したのであろうか。それにはまず彼の宿命的な出生から述べなくてはならない。津軽の地主の子として生まれた太宰は、両親の愛を知らないで育ったという。数多くの奉公人をおかえ、十人目に生まれた太宰にまで愛情が行きわたらなかつたのは無理のない事かもしれない。この暗い少年時代を描いた「思い出」が、彼の文学の出発となっている。いかにも前途の暗さを予測させるかのようなのである。やがて青年時代になり、左翼思想の影響を受けるに到って、自己が滅びる立場としての「地主」の子であることに絶望する。昭和四年（二十一歳）に第一回の自殺未遂事件を起こした時は、彼が自己の家たる「地主」を摘発する作品（「地主一代」）を書き始めた頃のことであった。この「家」の告発は、と

りもおおさず自己への告発ともなり、家から追われる身となつてゆくのである。

こゝで作品をあげてみると、

「無間奈落」 昭和三年

「花火」 昭和四年

「地主一代」 昭和五年

など、いずれも封建性に抵抗し、津島家の告発を意味する作品である。大正一二年（太宰十三歳）に父源右衛門は死んで、昭和四・五年頃には、長兄文治が家長になっていた。この長兄が、弟の思想的傾向を喜ばなかったのは当然のことであつた。

「地主一代」は、暴虐無比な地主を描いて、地主階級の悪行を徹底的に暴露しようとした未完の長編である。この作品には、そんな兄の生き方に反抗して、貧しい人々と腕を組み合い、解放運動に立ち上がる弟も登場するが、当時の彼は、自らをそういうタイプの人間に変えていこうと努め続けていたようである。だが、彼の懸命な努力も、「地主の子」という厳然たる事実の前には力弱いものではなかつた。「私は賤民でなかつた。ギロチンにかかる役のはうであつた。」雄々しく封建性に立ち向かおうとした太宰も、この事実の前には力無く、滅びる側の人間として自己を設定するに到るのである。

折しも、弘前高等学校長が公金横領事件を起こし、学生はストライキをして反抗した。昭和四年二月のことである。これを題材にし

たのが、「学生群」である。太宰はこの事件を契機に先輩工藤永蔵（東大理学部在籍）を知り、非合法運動にシンパサイザアとして関係し始めた。その頃、兄弟の中で最も親しみを感じていた兄文治が死去し、大きな衝撃を受けた。この時、滞京中の長兄の耳にシンパ活動の情報が入り、弟に対する疑惑が深められた。当時コミュニケーションに対する政府の弾圧に耐えかねた太宰は仲間を裏切り、転向してしまう。

或る月のない夜に、私ひとりが逃げたのである。とり残された五人の仲間はすべて命を失った。私は地主の子である。地主に例外は無い。等しく君の仇敵である。裏切者としての厳酷なる刑罰を待ってゐた。（「狂言の神」）

作品中の言葉をそのまま信じていくものかどうかわからないが、この仲間に対する裏切りの罪意識はその他の様々な負い目と重なって心の中の黒点となつていったのである。

昭和五年弘前高等学校を卒業し、四月東京帝国大学仏蘭西文学科に入学した太宰のもとに、高等学校時代親しくしていた小山初代が出奔上京してきた。間もなく長兄文治も上京し、十一月九日に会談がもたれた。

長兄は初代との結婚を承諾、生家からの分家除籍の条件として財産分与のかたちをとらず、大学卒業まで毎月百二十円的生活費を仕送りするという仮証文に署名させ、初代を落籍するため同伴して帰郷した。十一月十九日、津島家から正式に分家除

籍され、二十四日には長兄が津島修治名義で小山家と結納をかわした。（「太宰治年譜」）

こうして、義絶という犠牲を払って初代と婚約したのであったが、孤獨な太宰には又次のような自殺未遂事件が待ち受けていた。

（十一月）下旬、広島出身の銀座ホリウッドパアの女給田辺あつみ（十九歳）と識りあい、二十七・八日を本所、浅草、帝國ホテルなどですごし、二十八日夜半から二十九日の早曉の間、相州腰越津村小動崎神社裏海岸で、カルモチンを嚥下して心中をはかった。午前八時頃、苦悶中を発見されたが女は絶命、ひとり七里が浜恵風園に収容され、入院加療のところ一時は重態をつたえられたが経過良好で、完全に一命をとりとめうるこゝとなつた。津島家では急報におどろき、二十九日午後一時青森発の急行で次兄英治が鎌倉に急行した。十二月初旬の恢復後、自殺幇助罪として、警察の取調べをうけたが起訴猶予となる。（「太宰治年譜」）

左翼運動のかたわら恋人初代をめぐって二重の負い目を与えたのは、心中事件において女を死なしめたことであつた。初代のことで津島家の人々から絶交に近い仕打ちを受けていたことや、初代からの便りが一度きりしかなかつたことなどふと死ぬ氣になつたものであろうが、このいわば殺人行爲なるものが一生を通じて太宰を苦しめることもなつた。

私には、すべての肉親と離れてしまつた事が一ばん、つらかつ

た。Hとの事で、母にも兄にも、叔母にも呆れられてしまつたといふ自覚が、私の投身の最も直接な一因であつた。女は死んで、私は生きた。死んだひとのことに就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である。（「東京八景」）

こうして、愛を喪失し、絶望のあげく女を死なしめた後の、初代との結婚生活が順調に行なわれる筈がなかつた。今までに友を裏切り女をいわば裏切つた太宰の前に突きつけられたものは、妻初代の裏切りという厳然たる事実であつた。

ゆるすも、ゆるさぬもありません。ヨシ子は信頼の天才なのです。ひとを疑ふことを知らなかつたのです。しかし、それゆゑの悲惨。

神に問ふ。信頼は罪なりや。

ヨシ子が汚されたといふ事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたといふ事が、自分にとつてそののち永く、生きてをられないほどの苦悩の種になりました。自分のやうな、いやらしくおどおどして、ひとの顔いろばかりを伺ひ、人を信じる能力が、びび割れてしまつてゐるものにとつて、ヨシ子の無垢な信頼は、それこそ青葉の滝のやうにすがすがしく思はれてゐたのです。（「人間失格」）

正しく信じていたものに裏切られたショックは、太宰だけにその傷は深く、人間不信の淵へ突き落されてしまつたのも無理からぬ所である。やがて妻初代と水上温泉に心中未遂事件（「姥捨」）を起ここ

した後、二人は離婚することとなる。

太宰治は聖書をよく読んだ作家である。太宰はキリストを求めて遂にめぐりあえなかった作家である。このことについては、佐古純一郎の「太宰治論」においてくわしく探究されている。又、菊田義孝も、「太宰治と罪の問題」では同じような結論を出した。

キリストの「己を愛するが如く、汝の隣人を愛せよ」を、太宰は、「私の苦悩はこの難題一つにかかっている」と言っている。太宰は神の言葉を律法的に受けとめた。ヨハネの、「愛さない者は、死のうちにとどまっている」を言葉そのままに受け取ったようである。太宰は愛することが出来なかった。「弱さ、苦悩は罪なりや。」という。愛し得ない自己の現実、その弱さを罪として受けとめたのである。

しかし己を愛するが如く隣人を愛するといふことは、とてもやり切れるものではないと、この頃つくづく考へてきました。人間はみな同じものだ。さういふ思想はただ人を自然にかりたてただけのものではないでせうか。キリストの己を愛するが如く汝の隣人を愛せよと言ふ言葉を、私はきつと違った解釈をしてゐるのではなからうか。……さう考へた時、己を愛するが如くといふ言葉が思ひ出される。やはり己も愛さなければいけない。己を嫌って、或ひは己を虐げて人を愛するのでは、自殺よりほかないのが当然だといふことを、かすかに気がついてきました。……（「わが半生を語る」）

このように突きつめて考えていけば、自己を否定する以外に道があるまい。太宰には神の愛が信じられなかった。神の愛は信じられず、神の罰だけが信じられたのである。それでは神は罰を与えたか？三枝康高の言うように、「神がもし自分を罰しないならば、自分で自分を罰しよう。」ということではなかったか。「罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるような気がする。」（「人間失格」と太宰は言うのだが、ついに結論が出なかった。罪のアントがわからないということ、人生に対する解釈ができないというニヒリズムを示すものではなからうか。太宰はついにこのニヒリズムの淵に落ち込み、人生に敗北してしまつたのではなからうか。「待つ」という作品で太宰は、キリストとの邂逅を求めたようであるが、ついにキリストにめぐりあうことが出来なかった。

太宰の精神的な負い目は、以上述べた如く様々なものが複合的に影響し合つて精神の黒点となつていたのであるが、これに更に傷を与えたのが、パビナルの中毒であつた。鎌倉での自殺未遂事件後天沼に帰つて間もなく激しい腹痛に襲われ、篠原病院にて手術を受けた際胸部の痛みをおさえるために用いたパビナルの中毒にかつてしまふ。はじめは肉体的な苦痛のために用いた薬品であつたのだが、それを精神的な不安焦躁感を消すために用いたしたのである。薬を買う費用も長兄からの送金だけでは足りず友人に借金したりで、まるで狂人ようになっていった。折しも昭和十年八月設定されたばかりの第一回芥川賞候補に出した「道化の華」は、彼の

作品と行動に対し激しい罵倒を受けた末に落選してしまった。更に芥川賞に執着した太宰は、第二回にも外れ、第三回にも落ちてしまふ。この頃「虚構の春」「狂言の神」「創生記」などが書かれたが、病状はつのるばかりだったので、十月、井伏鱒二らのすすめに、より武蔵野病院に入院することとなった。しかし、病棟に入れられ、鍵をかけられて、脳病院であることを知った太宰は、もはや友さえも信頼出来なくなってしまうたのである。

いまはもう自分は、罪人どころではなく、狂人でした。いいえ、断じて自分は狂ってなどゐなかつたのです。一瞬間といへども、狂った事は無いんです。けれども、ああ、狂人は、たいてい自分の事をさう言ふものだそうです。つまり、この病院にいられた者は氣違ひ、いられなかつた者は、ノーマルといふ事になるやうです。

神に問ふ。無抵抗は罪なりや? (「人間失格」)

ついに太宰は狂人にされた。「陸人として」の刻印を押されてしまったのである。「このたびの入院は私の生涯を決定した。」(「碧眼托鉢」と言う。入院中に妻初代が裏切り事件を起こした事も含んでいよう。病院生活の様子は、「HUMAN・LOST」となつてあらわれ、間もなく「二十世紀旗手」も書き上げられた。

太宰治に対する批評家としてまず上げられるのは、奥野健男である。奥野氏は太宰を形態的に分析し、心理学的な考察を試みた。資本主義社会の衰退期における典型的な人間の精神を象徴する太宰

は、社会秩序に対して反逆を、ナルシズムに対しては自己破壊を、生家に対しては脱出を試みた。いわゆる「下降指向」の道をたどつたのである。そして、性格的には、「自閉性」「外界との生ける接感の欠乏」「疎外感覚」といった、典型的な分裂性性格と見ている。確かに太宰には被害妄想的な所があり、病理学的な解釈を施されても仕方のない所があつた。コミニズムからの脱落は太宰をして終生その罪にさいなまれしめたとする奥野氏の説は、社会に反逆した日蔭者としての太宰の一面をよく示している。

この奥野氏と似た解釈をしているのは三枝康高である。

太宰にとって「己れの義」とは、とりもなおさず「転向者」に他ならぬと私には思われる。だから太宰における神の原型はマルクス主義であり、かれは革命に代えるに信仰をもつてし、そのこと自体の矛盾から死を選ばざるを得なかつた。(「太宰治」)

と三枝氏は、転向者としての苦悩からその罪の意識の発生を見当づけている。「私は、大地主の子である。転向者の苦悩? なにを言ふのだ。あれほどたくみに裏切つて、いまさらゆるされると思つてゐるのか。」(「虚構の春」という言葉は、自己の裏切りに対する罪の意識の深さをつくづく感じさせる。奥野氏は、「一九三〇年代の作家が弾圧や拷問により転向したが、誰も太宰のような罪意識を持たなかつた。すべて罪を他者―社会―に転嫁してのがれたのに対し、太宰は転向を自己の心情の問題として受けとめ、最大の罪意識

を背負った。」と、「太宰治論」で述べている。

佐古純一郎は、裏切りの罪意識はむしろエゴイズムの問題ではないかとして、奥野氏とは違った解釈をしている。佐古氏の心をとらえたのは、江ノ島での情死事件であり、女を死なせた、いわば殺人行為としての罪意識を重点的にとらえている。

江ノ島の情死事件が単なる自殺幇助罪ではなく、殺人罪であったということは、もちろんいまここで私は断定してはいけな
と思うが、「忘れかけると、怪鳥が羽ばたいてやって来て、記憶の傷口をその嘴で突き破った」その過去の罪とは、あの江ノ島の情死事件のことではなかっただろうか。そうすると、太宰治のテーマは「罪と罰」のラスコーリニコフの苦悩だったのかもしれない。（「太宰治論」）

「罪のアントニムを問うた大庭葉蔵の運命はまさしくラスコーリニコフの運命だったのかもしれない」とすれば、あの江ノ島の情死事件はもしかすると太宰に殺意があつてのことではなかったかと佐古氏は述べる。

「実は、あれは心中未遂ではなく、完全な太宰の殺人だったらしい。当時取調べに当つた刑事部長がね、今でも小田原に
いるんだ。調書も鎌倉署に遺っている筈だが、どう見ても心中だとは思えなかった。明らかな殺人だったが、当人は帝大の学生でもあるし、兄さんは青森の県知事か何か、親父さんは貴族院議員だつたりしたので、また、当人の将来もあることと起訴猶予

にしたと云うんだがね。今なら太宰ももう死んで名誉毀損にもなるまい。むしろ女をころした太宰の文学的執念というか……

そういうものが、非常に強烈に我々には来るんだな……」（五味康祐「われらの牀は青緑なり」「文学界」三十五年一月号・佐古純一郎「太宰治論」より引用）

このことが真実とすればゆゝしきことであるが、「道化の華」冒頭の「僕はこの手もて、園を水にしづめた。僕は悪魔の傲慢さまで、われよみがへるとも園は死ね、と願つたのだ。」という言葉や、「『女は死んだよ。君には死ぬ気があつたのかね。』葉蔵は、だまつてゐた。」という文章を見ると、ふと疑惑にかられる。

「われよみがへるとも園は死ね、と願つた」太宰がたしかに実在したのではないだろうか。そしてそれは文学的執念などという言葉で美化されてよいものだろうか。（「太宰治論」）

と、佐古純一郎は抗議している。しかし、太宰の作品中の言葉をそのまま、現実に当てはめてもどうかと思われる。文学作品はあくまで虚構だからである。たとえそれが真実だったとしても。

これまでの批評家と違って、青森県出身の相馬正一は、自身の足で歩き、目で確かめて太宰研究を行なつた。相馬氏のテーマは、「家」とおかれている。不思議な権威を感じさせるものとしての「津島家」に対する異常な関心に太宰の文学は由来するものであり、「家」は太宰を支えるものであつた。しかるに太宰は「家」を告発するに到つた。太宰としては、時代思潮の影響もさることなが

ら、「家」の告発がとりもなおさず文学の出発であった。つまり文学では家を告発しつつも、現実的にはそれを一つのエリート意識として家に寄りかゝり、金銭的な援助を何の抵抗もなしに受けていた感がないでもない。つまり、太宰治のマルキシズムは多分に観念的なものではなかったかと相馬氏は言う。「これまでの太宰には、文学という隠れ義を着て「家」にもたれかゝっていた嫌いだけれどもなかった。「家」に対していかなることを試みても総べては許されてある、といった一種の甘えとエリート意識が働いていた」(「若き日の太宰治」 太宰にとつて、現実的に起った義絶はかなりのショックだったにちがいない。何よりもこの時の太宰を脅かしたものは義絶によって招来される実生活上の不安と恐怖ではなかったか。

さすがに義絶のもつ意味の重さとこれから先の生活の不安と恐怖におののいたのではなからうか。太宰の意識内に何らかの形で「家」に対する罪悪感が芽生えたとすれば、この時をおいてほかにほ考えられない。長兄の激しい怒りに対する驚きと家郷の人々に「呆れられてしまった」という絶望感が、この時の太宰を「一そううちのめしたに違いない」。(「若き日の太宰治」)

この「家」に対する負い目が、分家除籍という一方的な宣告を契機として次第に一種の罪意識に昇華してゆく。更に鎌倉入水事件において死なしためた女に対する罪意識と複合されて、自意識の過剰な太宰をますます絶望的にしていったのではないかと相馬氏は述べている。

罪の意識をもって自己を滅ぼした太宰の姿はやはり人生への敗北を示すものではないか。もっと積極的に人生を解釈すべきではなかったらうかと、その死が惜しまれてならない。しかし、罪に苦しむ苦悩の人としての太宰の姿は、その倫理的性格をよく表わしている。とかく良心の欠乏しがちな現代社会に、太宰のような真摯な人間の姿は、何らかの教訓をもたらすのではなからうか。

(昭和三十九年度卒業生)